

19世紀文化論ノート（上）

—— 怪物が生れる時

大 貫 徹

0. はじめに

ロバート・ルイス・スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson）の『ジークル博士とハイド氏』（*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*）[1885年暮れ執筆，1886年刊行]⁽¹⁾と云えば誰知らぬ者のない物語である。ここでは、この有名な物語を詳しく読むことで、19世紀も後半、ヴィクトリア朝時代のロンドンという近代都市そのものの中で生じつつあった、都市空間に関する変容について何ほどかの示唆を行いたい。

この物語の粗筋は次のようである。

医学、法学の博士号を持つ高潔な紳士ヘンリー・ジークル（Henry Jekyll）の家に、いつのころからかエドワード・ハイド（Edward Hyde）と名乗る醜悪な容貌の小男が出入りするようになった。しかもハイドは殺人事件まで引き起こすような邪悪な性格の持主である。友人たちはそうした奇妙な関係にすぐ気づいたが、それを曖昧に見過ごしているうちに、やがてハイドがジークル博士を殺害してしまったのではないかとの疑惑が高まり、友人のひとりがジークル博士の家にあわてて駆けつける。すると、そこには博士の姿はなく、ただ博士のだぶだぶの服を身につけたハイドの遺骸が横たわっているだけであった。謎が解けぬまま、後に残されたジークル博士の手記を読むと、ハイドとは薬によって姿を変えたジークル博士その人であったという驚くべき事実が判明する。

高潔な紳士ジークル博士と容貌醜悪で邪悪な性格の持主ハイドとは同じ

人物であるというところがこの物語のみそである。そこから人間の心に潜む善と悪の戦いを二人の人物に象徴させ、「二重人格」の代名詞として今なお名高い物語ということになるわけである。

1. 誘惑の主題

ところで、なぜジーキル博士はハイドに変身しようとしたのであろうか。その辺の事情に関して彼はその手記の中で次のように記している。

私の最大の欠点は、抑えることのできない享楽性にあった。(中略) 私は自分の快楽を人に隠すことを始め、分別のつく年令に達して周囲の状況をも観察するようになり、栄達と社会的地位とを子細に検討し得た頃には、すでに甚だしい二重生活の深みに陥っていた。(中略) 私はこの善悪二つの要素の分離という着想を、愛する白昼夢として、心楽しく空想するようになっていたのである。この二つの要素を各々別個の個体に宿らせることさえできたら、人生から一切の耐えがたいものが取り除かれることになるだろう。(pp. 60—61)

しかしながら、世間からも高く尊敬され、自分自身もその姿には十分に満足しているらしいジーキル博士が、例え「二重生活の深みに陥っていた」とはいえ、どうしてそれ以上のことを望むようになったのかという点になると今ひとつはっきりしない。ただやみくもに変身したいという願望ばかりが先に立っているように思われる。より正確には「善悪二つの要素の分離という着想」を実際に試してみたいという欲望ばかりが先に立っていると言うべきであろうか。

この理論を実地に試験してみるまでには、私は長い間躊躇していた。これが命を賭ける冒険であることを私はよくよく承知していたの

である。(中略)しかし、かくも類例のない深遠な発見の誘惑は、ついに、身に迫る危険に対する警戒心さえ、打ち負かしてしまったのだ。

(p. 62)

おそらく、「類例のない深遠な発見の誘惑」こそがジーキルの変身への欲望を強く促すものなのであろう。と同時に、これが彼に破滅をもたらす直接的な動機ということにもなる。もちろん、「誘惑」という主題は、旧約聖書『創世記』の例を思い出すまでもなく、それほど珍しいものではない。現に、19世紀の初め、メアリー・ウルストンクラフト・シェリー (Mary Wollstonecraft Shelley) は、その傑作『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*) [1818年初版、1831年第三版刊行]⁽²⁾において、主人公ヴィクトール・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) が「怪物」を創造する際の心の高まりをそのような角度から描いている。

もっと、もっと多くを私は成し遂げよう。すでに記された足跡を踏み、新しい道を開き、知られざる力を探つてやろう。創造のもっとも深い神秘を世界に解き明かしてみせるのだ。(中略)私にとって生と死とは、仮想上の二つの領域でした。その境を初めて破る人となり、この暗い世界に光の滝を降らせよう。新しい種は私を創り主、みなもとと讃え、あまたの優れた幸せ者たちがこの私から生を受ける。私が彼らから受けるべき感謝は、世の父親が子に要求し得るよりもさらに完璧なものなのだ。(pp. 48—54)

大仰なとも言えるようなきわめて高揚した気分の中で、ヴィクトールは「怪物」を創造する。しかし、これがまさに誘惑の主題そのものであったことは、実は彼が「怪物」を創造した瞬間に判明する。

ほぼ二年近くも、無生物の身体に生命を吹き込もうという一念で励んできた私。(中略)それがなし終えた今、美しい夢はどこへやら、息も止まる恐怖と嫌悪で心は一杯でした。(中略)知識を得るのがいかに危険なことか、生まれた町こそ全世界だと信じこんでいる男の方が、おのれの本性が許す以上のものになると憧れる男よりどんなに幸せか。(p. 57 および p. 53)⁽³⁾

したがって、ジーキル博士の場合も、ヴィクトールと同様⁽⁴⁾、科学者の誘惑に駆られてとでも言うべき状態の中で、いわば後先を考えずに実験を試みたということになるだろうか。しかし、ジーキルは、もはや「分別のつく年令に達して周囲の状況をも観察するようになり、栄達と社会的地位とを子細に検討し得」える状態にあった人物である。野心に燃える若き「自然哲学」(p. 50) 学徒ヴィクトールとは異なり、地位も名誉も得たジーキルはなぜそれまでにして危険な誘惑に身をさらさなければいけないのであろうか。スティーヴンソンは、「人間の二重生活を分離結合する善と悪の精神領域を(中略)普通の人よりもはるかに深い溝で断ち切りざるを得なかったのも、[ジーキル]の理想の厳しさのためであ[り]、善悪両方面ともひとしく真剣であ[ったからだ]」(p. 60) (引用文中の[]内は、引用者が文意を明確にするために補ったものである。以下同様とする)としている。もちろん、ジーキルの真剣さ、真面目さこそがその大きな要因だということは十分納得できる。ある意味では『聖アントワーヌの誘惑』(フローベール)のような聖者伝にも似た真摯な雰囲気にはジーキル自身が含まれていたと言えるかもしれない。

2. 濃密な親和的空間

しかし、本当にそれだけの理由でそのような危険な誘惑に身を委ねてしまったのであろうか。むしろ、明確な言葉にこそならないが、ジーキル博

士の意識の奥底に潜んでいる——「抑圧されている」と言うべきか？——ある不満足な思いが恐ろしい冒険に彼を駆り立てたとは言えないだろうか。

もちろん、この物語の中にそうしたことが明示されているわけではない。しかし、示唆されていると言ったら言い過ぎになるだろうか。というのも、少し注意深くこの物語を読んでもみると分かることであるが、この物語にはすんなりと解読できない、きわめて不可解な部分が多々あるように思われ、しかもそれがすべて「ジーキル博士の意識の奥底に潜んでいるある不満足な思い」と堅く結びついているように思われるからである。

ともかく、ここでは、もう少し詳細にジーキル博士を巡る部分を読んでもみよう。すると、まず気がつくことは、彼がその中に生きている社会とは、思いのほか狭い社会であるということである。実際、そこに描かれた人間関係の網の目は驚くほど狭い。

例えば、ジーキル博士と同じく、物語の主要人物である弁護士アタスン (Utterson) と医学者であるラニョン博士 (Dr. Lanyon) は「二人は古くからの友達で、小学校から大学までを通じての同窓」(p. 15) という間柄であるばかりではなく、さらに「ヘンリー・ジーキルのいちばんの古い友だちといえば、どうしたって、君 [ラニョン] と僕 [アタスン] だろうね」(p. 15) とか、「われわれ三人 [ジーキル, アタスン, ラニョン] は、ねえ、ラニョン、ずいぶん古い友だちだ。長生きしたって、もうこんな友だちは、できやしないからね」(p. 36) と、互いに囁き合う関係でもある。実際、登場人物のほとんどが古くからの友人、知人同士であったり親戚関係であったりという具合になっている。

もうひとつ、別な例をあげよう。サー・ダンヴェズ・カルー (Sir Danvers Carew) という人物は物語の中でハイドに実際に殺される唯一の人物であるが、彼が殺されることになったのも、深夜、郵便を出そうと郵便ポストに赴く途中、たまたまハイドと出会い、彼に道を尋ねたからである。

おそらく、ハイドの方に何かいららすることでもあったのだろう。老紳士（カルー）の話をしているうちに、ハイドは急に怒りを爆発させ、「老紳士を地べたに殴り倒し、次の瞬間には、凶暴な猿のように、相手を足で踏みじり、めちゃくちゃに殴りつけ、そのため、骨は音を立てて砕け、死骸は路上に跳ね上がった」（p. 26）という凄まじい惨殺場面が展開される。⁽⁵⁾ところが、殺害場面の描写の最後に、老紳士は「封をして切手を貼った一通の封書を持ってい」（p. 26）で、そこには「アタスンの名前と住所が書かれてあった」（p. 26）という一節が記される。この一節が置かれることで、ここでもアタスンとの知人関係が明示されているのである。言うなれば、この老紳士はアタスンに手紙を出すために深夜外出したことが直接の原因となって殺害されてしまったわけである。しかも不思議なことに、その手紙がアタスンによって開封された後も、それがどのような手紙であったのか言及されることがまったくない。

それに第一、この物語は、アタスンと彼の遠い親戚でもある友人エンフィールド（Enfield）がある裏通りを散歩している際、エンフィールドがしばらく前にこの裏通りで偶然に目撃したある不気味な事件をアタスンに話すことから始まるのではない。実は、それよりもかなり以前、アタスンのところにジーキル博士からきわめて奇妙な遺言状が送られてきたことから始まるのである。

[昼間、エンフィールドの話聞いた] その晩（中略）金庫を開いて、いちばん奥から『ジーキル博士遺言状』と書いた封筒入りの書類を取り出すと、腰を下ろし、眉を曇らせながら、その内容を調べ始めたのだ。（中略）この書類は長い間弁護士の頭痛の種になっていたものだった。（p. 14）

どうして「頭痛の種になっていた」というと、この遺言状は、ジーキ

ル博士が死亡した場合あるいは「三カ月以上にわたる失踪、もしくは理由不明の不在の場合」(p. 14)、正体不明のハイドという人物にジーキル博士の財産を譲渡することが明記されていたからである。

こうしたいくつかの例でも明らかなように、この物語はすべてジーキル博士と弁護士アタスンを中心とするきわめて狭いサークルの中で生じている。しかも、古くからの友人、知人さらには姻戚同士というような濃密な人間関係の網の中で進行しているのである。きわめて親密であるがゆえにきわめて狭いという人間関係がここに見られるのである。

さらにもうひとつ。この物語の登場人物はすべて男性ばかりであるという点にも注意したい。単に男性ばかりというのではない。ジーキルもアタスンもラニョンもエンフィールドもみながみな独身であるという点も強調したい。とすれば、ここに描かれた世界とは、ウィリアム・ヴィーダーをはじめ多くの批評家が指摘する通り⁽⁶⁾、ホモセクシャル的な雰囲気をそれとなく漂わせた濃密な人間関係の世界ということにならないだろうか。まさに、吐き気を催すほどの息苦しさを感ぜさせる濃密さがあたり一面に充滿している世界ということに。

そもそも、この物語の進行役とでも言えるアタスンとその友人エンフィールドとの関係自体きわめて不可思議なものではなからうか。例によって、「彼の友だちというのは、身よりのものか、さもなければ、ごく古い知り合いかであった」(p. 8)と紹介されるアタスンがどうして「評判の遊び人」(the well-known man about town) (p. 8)と言われているエンフィールドと友情を結んでいるのかきわめて謎なのである。実際「この二人が、お互いにどんな点を認め合っていたか、また、どんな事がらに共鳴し合っていたか、多くの人たちは謎だった」(p. 8)と記されているし、さらに「日曜日などに二人が散歩をしているのを見かけた人の話では、二人は別に話をするでもなく、ひどくつまらなそうな様子で、誰か友だちでも見かけると、いかにもこれで救われたという顔で声をかけるというの

だ。それでいて、二人はこの日曜の散歩を何よりも大切に、毎週のいちばん楽しみな行事のように考え、この散歩を自由に楽しむためなら、ほかに遊ぶ機会があっても振り向かないばかりか、必要な用事さえ捨てて顧みないのだった」(傍点引用者)(p. 8)というのだから、まったくもって二人の関係は不可解そのものである。そのうえ、エンフィールドはこの物語においてはまったくの副次的人物に過ぎず、冒頭場面の後は、事件の終盤近く、再び日曜日の散歩の場面にはほんの端役として登場するだけであるから、これほど詳しく二人の関係を述べる必然性がどこにもない。だからこそいっそう二人の関係の奇妙さが浮き上がってくるのである。

もちろん、この二人の関係を明確に突き止めることなどできない。ただ漠然と感じとるだけである。しかしながら、二人の間には先に述べたようなホモセクシャル的な匂いがどこことなく漂っていると言うことだけはできるのではなからうか。実際、そのような関係を考えないと二人の「奇妙な」結びつきがよく分からないからである。しかし、ここで特に注意したいのはそのことではなく、実は「[日曜の散歩の際]二人は別に話をするでもなく、ひどくつまらなそうな様子で、誰か友だちでも見かけると、いかにもこれで救われたという顔で声をかけるというのだ」という傍点箇所を含む一節である。これはどういうことなのであろうか。一緒に過ごしたいと思っていることは確かであろう。しかし、同時に、一緒に居ると息が詰まってくるような激しい嫌悪感をも覚えてしまうのもまた事実であるということなのだろうか。言い換えれば、濃密であるがゆえに感じる息苦しさということなのであろうか。それが「いかにもこれで救われたという顔で声をかける」ということなのであろうか。

3. 親和的空間の裂け目

もしそうであるとするならば、「ジーキル博士の意識の奥底に潜んでいるある不満足な思い」とは、おそらく、彼を取り巻く人間関係、つまり濃

密であるがゆえにきわめて息苦しい関係への不満足な思いということになるのではなからうか。だからこそ、地位や名誉もあり分別のつく年齢にも達しているにも拘わらず、ジーキルは、この狭い社会からの一瞬の逃亡を夢見て、「変身する」という危険な誘惑に身を任せたのではないか。実際、ジーキルが変身したハイドという存在は、この親密な人間関係の網の目の中に生じた陥没点とでも言うか、ひとつの裂け目のような存在と思われるからである。いわば、突然どこからか現れた《alien》とでも言うべき存在であって、言い換えれば、誰もが解読できない、まったく別な世界の記号のような存在なのである。

こうした解読不可解な存在ということに関して、ここにたいへん興味深い物語がある。それはエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) の有名な短編作品『モルグ街の殺人』(*The Murders in the Rue Morgue*) [1841年雑誌初出] である。この短編は、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の長編作品『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*) [1841年雑誌連載開始] と並んで、文学史上最初の推理小説のひとつと言われている⁽¹⁾のであるが、この推理小説のみそは、この事件の犯人が、人間ではなく、ボルネオから連れて来られたオラン・ウータンであったという点である。19世紀も半ばのパリの、そのど真ん中にオラン・ウータンがいるということの意外性がポーの着想の素晴らしさであり、また彼の腕の見せどころであったのだと思われる。パリという近代文明の中心そのものの場所にオラン・ウータンという野生の動物が現れるということで、文明と野生、都市と自然というきわめて固定した二項対立的構図が根底から崩壊させられているのである。これこそがこの推理小説の面白さの最大の要素であって、パリの真ん中で東インド諸島産の野獣が跋扈するということなど、(読者を含む) 多くの人にとってはとうてい予測がつくものではない。まさしく想像力の彼方にある着想である。だからこそ、それが推理上の死角となって警察当局がまったくの別人を誤認逮捕してしまったのである。ポーは固

定した都市イメージをいわば逆手にとったというわけである。

アタスンたちの親密な共同体内部においては、ハイドという人物は、このオラン・ウータンと同様に、尋常な想像力の彼方にあるような存在なのである。⁽⁶⁾まさに「途方もない」としか言いようのない存在なのである。その途方もなさをアタスは以下のように描いている。これは、アタスンが眠れぬままに、まだ見ぬハイドの姿を想像している場面である。

カーテンを下ろした部屋の、濃い闇の中で、悶々と横たわっている時、エンフィールドの物語が、一卷の幻燈画のように次々に、[アタスン]の心の前に映しだされていった。一面に街灯の輝いている夜の都会。ひとりの男が足早に歩いて行く。(中略)その男の姿が、一晩中、弁護士[アタスン]を悩まし続けた。うとうと眠りかけると、またしてもその男の姿が、忍びやかに、いっそう忍びやかに、寝静まっている家々を出入りしたり、街灯の光の冴えた都会の、広い迷路のようなところを、だんだん足早に、さらに足早に、ついには目にもとまらぬほどの速さで走り回って、街角という街角で、子供を踏み倒しては、泣き叫ぶままに打ち捨てて行く場面が見えるのだ。それでいて、その男の姿には、見覚えのできるような顔がなかった。夢の中でさえ、その男には顔がなく、あっても、それは決まった顔ではなく、彼の目の前でぼうっと消えてしまう顔であった。(傍点引用者)(p. 16)

この時点では、アタスはまだハイドの顔を実際に見ていないのだから、「その男の姿には、見覚えのできるような顔がなかった」というのも当然と言えば当然である。しかし、この後、ハイドと実際に会い、わざわざその顔を「お顔を拝見したいのですが」(p. 18)と頼んで見せてもらった後も、彼の顔がまったく馴染みのない顔であるという印象は変わらない。むしろ、その印象は強まり、「悪魔の極印つきの顔」(p. 19)とさえ言って

いる。

ハイドに取り残された弁護士は、落ち着かない面持ちで、しばらくその場に佇んでいた。やがて、ぶらぶらと通りを歩き始めた。(中略) アタスンがハイドを見て感じた、あの得体の知れない厭な気持ち、憎悪、恐怖の念を説明するわけにはいかない。(中略) [アタスン] は当惑して言った。「何と言っていいかは分からないが、確かに、このほかにまだ何かあるのだ。そうだ、あの男はどうもこの世の人間とは思えない！穴居人みたいだと言ったら、どんなもんだろう？(中略) 悪魔の極印つきの顔というのがあるとすれば、それはジーキル、きみの新しい友人の顔だということになるぞ」(p. 19)

単に「馴染みのない顔」というだけではなく、「悪魔の極印つきの顔」と言い切っていることで明らかなように、アタスンにとって、ハイドとは単なる見知らぬ人という枠を越えた存在なのである。むしろ、嫌悪感、恐怖感さえ伴ったきわめて唾棄すべき「別な世界の存在」ではないのかという不気味な思いさえハイドに感じているようである。だからこそ、アタスンは「あの男はどうもこの世の人間とは思えない！穴居人みたいだったと言ったら、どんなもんだろう？」と彼なりの言葉でそうした存在のもつ不気味さ、不可解さ、「途方もない」様子を述べているのである。先の引用文中で「夢の中でさえ、その男には顔がなく、あっても、それは決まった顔ではなく、彼の目の前でぼうっと消えてしまう顔であった」という記述がなされるのも、ハイドの顔がまったく馴染みがないからであるが、同時に彼の意識の中には「[ハイドのような顔は]消えてしま」ってほしいとひそかに願っている気持ちが強いからでもあろう。実際、アタスンの意識には「得体の知れない厭な気持ち、憎悪、恐怖の念」しか残っていなかったからである。まさしく、彼はハイドという存在を強く否定——フロイトなら

ば「否認」(Verleugnung) と言うところであろう⁽⁹⁾——したいと心から願っているのである。

それにしても、眠れぬままアタスンが思い描いたハイドの姿は鮮烈である。ことに先の引用文中の傍点部分は強烈な印象を与える。ここには、ジーキルやアタスンたちが住むきわめて親和的な世界とは完全に異なる世界が描かれている。⁽¹⁰⁾「濃い闇の中で(中略)街灯の光の冴えた都会」という形で、あるいは「一面に街灯の輝いている夜の都会」という形で、明と暗とがこの上もなく対比的な世界。複雑な迷路からなる迷宮的な世界。その中を悪魔のごとく駆け回っては次々と純真な子供たちを非情にも踏み倒しては立ち去って行くハイド。まさに一種の地獄図画的な世界である。おそらく、これが親和的空間の裂け目から垣間見たもうひとつの世界であり、まさにきわめて唾棄すべき世界の姿なのであろう。

4. 近代都市特有の空間構造

しかしながら、明暗対比(キアロスクーロ)[chiaroscuro]的な二重性に彩られた迷宮的な大都会の中をしきりにうごめいている、ハイドのような正体不明な<alien>的人物とは、むしろ、19世紀も後半、ヴィクトリア朝時代とか第二帝政時代とか呼ばれる時期のロンドンやパリという近代的な大都市にとってみれば、きわめて当たり前の存在ではなかったろうか。

そもそも、19世紀も半ば近くなると、ロンドンやパリといった大都市への農村人口の急激な一極集中が始まり、そのため中世以来の伝統的な都市空間が急速に崩壊し始めたとは多くの論者が指摘することである。そのひとりである社会学者の若林幹夫はその辺の事情を建築家である原広司の均質空間論⁽¹¹⁾を踏まえながら次のように言う。

ロンドンやパリ、東京といった都市の「[近代]都市化」は、そこにそれまで存在してきた都市の人口が増大したということ以上のことを

意味している。そこでは都市という場所に存在する社会のあり方が、それまであった都市とは異なるものへと変容を始めるのだ。(中略)

[伝統的都市]において人々は、都市空間のなかに累積され、物理的な空間によって表現を与えられている都市の場所論的な構造を参照し、それに重ね合わせるようにして、行為や関係を累積させてゆく。(中略)それにたいして[19世紀以降の]近代の都市では、行為や関係の多くが伝統的な都市空間の場所論的な構造を参照することなく累積され、それらの累積が結果的に新しい構造をつくり出してゆくのである。(中略)19世紀のなかばから、都市そのものが歴史の流れのなかに投げ込まれ、成長と変容をとげながら巨大化してゆく身体・物財・記号の集合し流動する領域とな[り、近代の都市は]巨大で均質化された絶対空間へと変容を始める。¹²⁾

テンニース風に言えば、それまで社会の中核にあったゲマインシャフト的な生活の領域が次第に萎縮し始め、やがてゲゼルシャフト的な生活が中心となってゆくことが伝統的都市から19世紀の近代都市への移行の中身だということになるか。¹³⁾ただ、若林の中心論点は、近代都市とはその空間がすべて均質化し、中心も周縁もない、いわば脱-場所化したものであるということであり、さらにはそうした都市の空間構造が、均質化し脱-場所化していった19世紀という近代社会のあり方とより深い部分で結びついているということである。その典型的な例として、若林はオスマン男爵によるパリ大改造(1853年—1869年)の場合をあげる。

[オスマンによるパリの]大改造が、第二帝政の権力の舞台へとこの都市の空間を改造するものである以上に、幅員の広い街路や建造物の建て替えによって中世以来のパリに由来する街区や住民の共同性を解体し、革命の温床であった労働者階級を都市空間から駆逐して行く

ものであり、中世以来の都市空間を直線によって裁断することで、そこに存在していた社会をそのものにたいして外科的働きかけをする試みであった。(中略)もはや空間には固有の社会的な意味などなく、均質化され脱-場所化された空間上の交通と循環の機能だけがそこにあるということなのである。⁽¹⁴⁾

かくて、近代都市特有の幾何学的な抽象空間の中を馬車が、人が、物が、商品が、貨幣が休みなく動き回ることになったのである。とりわけ、中心も周縁もなくなった、いわゆる《のっぺらぼう》な空間⁽¹⁵⁾の中を無数の人々があてもなくさまよい歩くことが盛んになってきたのもこの時期である。ことに、夜、ガス灯で光り輝く中を散歩する遊歩者(ノクタンビュール) [noctambule] と呼ばれる存在の群れが目立つようになってきた⁽¹⁶⁾ことはつとにヴァルター・ベンヤミンの指摘するところである。⁽¹⁷⁾

例えば、彼自身光り輝くロンドンの街路の中を夜に散歩するのが大好きであったディケンズ⁽¹⁸⁾がその代表作『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*) [1840年-1841年雑誌連載]の冒頭において、あるいはポーが『群衆の人』(*The Man of the Crowd*) [1840年雑誌初出]の中で、それぞれ、当時のロンドンの人々の夜歩きの様子(ノクタンビュリスム) [noctambulisme] を次のように描いてみせている。

私の散歩の時間は、だいたい夜になっている。(中略)街路灯やショーウィンドウの光でサッととらえる通りすがりの顔の一瞥のほうが、陽光のもとで顔があからさまに示されるより、役に立つことが多かった。事実、本当のことを申しあげれば、この点で、夜は昼間より親切だ、ということが出来る。昼間は、空中楼阁ができあがった瞬間に、それを何の遠慮会釈もなく打ち壊してしまうからである。

あの絶え間ない往来、あの果てしのない落ち着きのなさ、ゴツゴツ

した石をすりへらしてツルツルした、滑らかなものにしてしまうあの休みのない足の歩み。(中略)テムズ川にかかった橋(中略)の上をたえずゆきつもどりつしている群集がある。(ディケンズの『骨董屋』から)⁽¹⁹⁾

この街というのは、ロンドンでも目抜き通りの一つなので、終日人通りは非常に多かった。だが、日没が近づくと、さらに人出は刻々と増えて来て、すっかり街灯が光を増す頃には、もう絶え間ない二つの人の流れが、慌しげに店の前を往来していた。(中略)通る人々のまづ大半は、何思うこともない、さも用ありげな顔でそくそくと、ただ人の群れを押し分けて、家路を急ぐことしか考えていないようだった。みんないっせいに眉をひそめ、忙しげに目をきょろつかせて、たまたま突き当たって行くものがあったても、別に腹を立てる気色もなく、ただ服を直しては、またどンドン急いで行くのだった。(ポーの『群衆の人』から)⁽²⁰⁾

ここで描かれているのは、ロンドンの街中を、ことに、夜、人工の光によって照らし出されている街路の中を押し合いへし合いしながらたえず往来している無数の人々の様子である。しかも、その無数の人々が一個の存在として個々に描かれているというのではなく、匿名的な集団としてまさに一塊となって——「みんないっせいに眉をひそめ」というような奇妙な一様性さえ認められる⁽²¹⁾ほど一塊となって——うごめいている姿が描かれているのである。もちろん、集団と言っても、そこに何らかの結びつきがあるわけではない。それどころか、これほどまでお互いに疎隔させられている集団はないといってもけって過言ではないような状況である。だからこそ、それを群集と呼ぶ⁽²²⁾のだろうが。

ところで、こうした状況がある意味ではディケンズやポー以上に見事に

描いているのは、実は、18世紀も末、1786年に書かれたゴシック小説の傑作『ヴァテック』(Vathek)の作者ウィリアム・ベックフォード(William Beckford)である。ベックフォードは19世紀的な群集の姿をあたかも予言したかのように以下のごとく描いている。

この巨大な広間のただ中を、無数の人々が絶えず往来していたが、彼らはその右手を心臓に当てたまま、周囲には一度も視線を投げかけなかった。彼らのことごとくが死のおぞましい蒼白の相を面に浮かべていた。眼窩に深く落ち窪んだ彼らの目は、夜々墓場に光る流星の燐光に似ていた。ある者は深い物思いに沈んだままゆっくりと歩み、ある者は苦悶の叫びをあげ(中略)猛々しく走り回っている。また別な者たちは怒りのままに歯軋りし、その忿怒の相たるや、最も獍猛なる狂人よりもものすさまじい。彼らはすべて互いを避け、誰も数えることが出来ぬほどの大群集に取り囲まれているのに、一人一人は、まるで未踏の砂漠にただ一人という風情で、他の人間の存在にはさらに気もとめず、ただひたすらでたらめに歩き回っているばかりであった。²³⁾

ベックフォードが予言的に描いて見せた「未踏の砂漠にただ一人という風情でただひたすらでたらめに歩き回っているばかり」の、この孤独な大群集の姿こそ、19世紀も後半の近代都市ロンドンやパリにおいてうごめいている無数の人々の姿そのものだったのではなからうか。したがって、ハイドが「一面に街灯の輝いている夜の都会」の中を足早に歩いて行き、そこでばったり出会った子供を踏み倒し、子供が「泣き叫ぶ悲鳴などには耳も貸さずに立ち去って行く」というようなことは、少なくともディケンズやポーが描いたようなロンドンの街中では少しも不思議ではないように思われる。とすると、アタスンが思い描いた地獄図的な世界とは、実は、近代都市特有の世界ということになるのではなからうか。(以下、次号)

註

- (1) ≪*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*≫という原題をそのまま日本語にすれば『ジークル博士とハイド氏の異常な事件』ということになるのか。そこに病理学的なニュアンスを込めれば『ジークル博士とハイド氏の異常な症例』とすべきかもしれない。しかし、この物語の邦題は伝統的に『ジークル博士とハイド氏』となっているので、ここでもそれに従った。

なお、ここではテキストとして以下のものを使用した。

Robert Louis Stevenson : *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde and Weir of Hermiston*, edited with an Introduction by Emma Letley, Oxford University Press, 1987, ≪The World's Classics≫.

『ジークル博士とハイド氏』からの引用はすべて上記テキストからである。したがって、引用箇所に関しては引用の最後にその頁数のみを記すこととする。

- (2) ここではテキストとして以下のものを使用した。

Mary Wollstonecraft Shelley : *Frankenstein or The Modern Prometheus*, edited with an Introduction by M. K. Joseph, Oxford University Press, 1980, ≪The World's Classics≫.

このテキストもその原題をきちんと日本語にすれば『フランケンシュタインあるいは現代のプロメテウス』となるだろうが、今までの通例に従って、単に『フランケンシュタイン』とする。このテキストからの引用も、註(1)と同様、引用の最後にその頁数のみを記すこととする。

- (3) この引用において、引用頁数が示すように、実際には、「知識を得るのがいかに危険なことか、生まれた町こそ全世界だと信じている男の方が、おのれの本性が許す以上のものになると憧れる男よりどんなに幸せか」の方が先であるが、ここでは論旨を明確にするため、あえてその順序を逆にした。

- (4) なお、ジークル博士とヴィルトールの比較のみならず、『ジークル博士とハイド氏』と『フランケンシュタイン』との間のさまざまな視点からの比較的考察に関しては以下の論文に詳しい。

Gordon Hirsh : *Frankenstein, Detective Fiction, and Jekyll and Hyde*, in *Dr. Jekyll and Mr. Hyde after One Hundred Years*, edited by William Veeder and Gordon Hirsh, University of Chicago Press, 1988, pp. 223 — 246.

- (5) ハイドによるカルー殺害に関しては、われわれの観点とは多少異なるものの、以下の書物が興味深い解釈を加えている。

Willam Veeder : *Childen of the Night — Stevenson and Patriarchy*, in *Dr. Jekyll and Mr. Hyde after One Hundred Years*, edited by William Veeder and Gordon Hirsh, University of Chicago Press, 1988, p. 119 および pp. 127 — 128.

Elaine Showalter : *Sexual Anarchy — Gender and Culture at the Fin de Siècle*, Penguin Books, 1991, p. 111.

- (6) 例えば、以下のようなものがある。

Willam Veeder 前掲論文, 107 頁—160 頁。

Elaine Showalter 前掲論文, 105 頁—126 頁。

ウラジミール・ナボコフ『ヨーロッパ文学講義』（野島秀勝訳）（TBS ブリタニカ, 1982 年, 251 頁—252 頁）

- (7) 小池滋『ディケンズ——19 世紀信号手』（英米文学作家論叢書 5, 冬樹社, 1979 年, 59 頁）

- (8) この物語の中で、ポーが、オラン・ウータンという動物を残酷な殺害者を選んだのは単なる偶然ではないだろう。そもそも、ポーはこの物語の中で以下のような一節を記している。

「じゃ、これを読めよ」とデュバンは言った。「このキュヴィエの本の、この所を」それは東インド諸島に棲む、大きな黄褐色のオラン・ウータンについての、詳しい解剖学的な、また同時に、主として叙述的な記述であった。この哺乳動物の、巨大な体軀、異常な力と行動力、野畜きわまる残忍さ、そして模倣的本能は、すべての人によく知られている。(Edgar Allan Poe : *Selected Writings*, edited with an Introduction by David Galloway, Penguin Books, 1967, P. 217)

「人間にきわめて近いが人間ではない」という『猿』を巡るさまざまな進化論的な言説は、直接的にはダーウィンの『種の起源』（1859年）を契機とする1860年代から1880年代にかけての英米文学においてもっとも盛んに使用されたものであるが、1841年に書かれた『モルグ街の殺人』はそうした言説の先駆的な例のひとつである、と高山宏は言う。[高山宏『19世紀文学VSダーウィニズム』（『進化論を愉しむ本』所収論文）（別冊宝島45号、JICC出版局、1985年、230頁—245頁）]明らかに、この物語のオラン・ウータンとは、引用箇所「模倣的本能」という言葉も示すように、「人間にきわめて近いが人間ではない」にも拘わらず、人間の仕草の模倣をたえず試みる（が、必ず失敗してしまう）存在の典型として用いられているのである。

実際、殺害を引き起こした直接のきっかけも、「[常日頃、] 鍵穴から覗いて主人 [が剃刀を使って顔を剃る] のを見ていたに違いな [く]、顔を剃る真似事をして」(pp. 221—222) みたくてたまらなかったからである。文字通り「猿真似」をしたというわけである。言うならば、ポーは19世紀全般の『猿』を巡る進化論的言説をこの作品では実に功みに利用しているのである。そして、まさにこの点において、つまり、単なる「意外さ」という水準だけではなく、『猿』を巡る言説という文化論的な点において、オラン・ウータンとハイドとが再び結びつくのである。（なお、この点に関しては、われわれが使用するOxford大学出版局版のテキストの [Emma Letley による] ≪Introduction≫をも参照されたい。）

先に、カルー殺害場面の描写を引用した際、その中に「凶暴な猿のように (with apeline fury)」という一節があったが、これは単なる比喩ではない。この物語の中で、ハイドは、ポーの作品でのオラン・ウータンと同様、「人間にきわめて近いが人間よりいささか劣っている」猿のように描かれているのである。事実、この物語の中で、ハイドはたえず猿を連想させるような言葉と共に描かれている。例えば「こう覆面をしたやつが猿みたいに (中略) 書斎の中へ逃げ込んだ時には」(when that masked thing like a monkey (……) whipped into the cabinet) (p. 47) のように。あるいは「そのためハイドは私 [ジーキル] に対して猿のごと

き奸計をたくらみ」(Hence the apelike tricks that he [=Hyde] would play me) (p. 75) のように。さらには「ヘンリー・ジーキルの手というのは大きめでがっしりとした白い美しい手であった。ところが、[この手は] 痩せて筋ばって節が高く色が青黒く、うす黒い毛がもじゃもじゃと生えている手であった。これがまさしくエドワード・ハイドの手であった」(But the hand (……) was lean, corded, knuckly, of a dusky pallor and thickly shaded with a swart growth of hair. It was the hand of Edward Hyde.) (pp. 66—67) のように。

それに第一、ハイドが醜悪な容貌で小男であるということ自体、猿を連想させるものであろう。実際、ジーキルが薬を飲むことなく急にハイドに変身してしまった時、その服装のだぶだぶである様子を伝える以下のような記述などは、まさに猿に人間の服を着せたような滑稽な記述そのものである。

その衣服は、生地こそ贅沢で地味な良いものだが、この男[ハイド]のものにしては、どこの寸法を取ってみても、馬鹿げて大きくだぶついているし、——ズボンはまたズボンで、だぶだぶと脚に垂れ下がるのを地面に引きずらぬように捲り上げ、上着の胴回りは尻の下まで来ているし、襟回りは肩の方までぶざまに広がっているという始末だった。(p. 56)

となると、ハイドとは単に悪を象徴しているだけではないであろう。もうひとつ別な何かをも象徴しているのだと言わざるを得ない。ではそれは何か。ここでは細かな論証その他を一切省いて、一言で言うならば、それは、おそらく、都市下層階級としての労働者層あるいは貧民層ではなかろうか。これに関してはまた別な機会に詳しく論じたいと思う。

- (9) ラプランシュ / ポンタリス『精神分析用語辞典』(村上仁監訳)(みすず書房、1977年、398頁)
- (10) ここは、あくまで「幻像(幻燈画)としてのロンドン」ということであるが、しかし全般的に、アタスの眼に映るロンドンの街はこの幻像とほぼ同じイメージ

で描かれていて、中には、以下の例のように、「悪夢 (nightmare)」という言葉が使われている場合さえある。

いつも消したことのない街灯の立ち並んだ陰惨なソーホーの街は、このように刻々に変化する眺めの中で、弁護士 [アタスン] の眼には悪夢 (nightmare) に登場するどこかの市街の一画のように思われた。(p. 27)

(11) 原広司『文化としての空間——空間概念論のためのノート・均質空間論』(上・下) (『思想』, 岩波書店, 1975年8月号および9月号)

(12) 若林幹夫『熱い都市 冷たい都市』(弘文堂, 1992年, 184頁—186頁)

(13) この辺の記述は以下の書物を利用した。

見田宗介, 栗原彬, 田中義久編『社会学事典』(弘文堂, 1988年, 257頁—259頁)

(14) 若林前掲書, 214頁。なお, オスマン男爵によるパリ大改造に関しては, 富永茂樹『オスマンとパリ改造事業』(京都大学人文科学研究所報告 河野健二編『フランス・ブルジョワ社会の成立——第二帝政期の研究——』所収論文) (岩波書店, 1977年, 205頁—228頁) に詳しい。

(15) 「<<のっぺらぼう>>な空間」とは, 例えばフリードリッヒ・エンゲルスが述べた次のような空間のことである。

ロンドンのように数時間歩きまわっても, 町はずれのはじめにさえ達せず, 近くに農村があることを推測させるような目じるしには, すこしも出会わないような都市は, いずれにしても独特なものである。(フリードリッヒ・エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態(1)』[全集刊行委員会訳] [国民文庫 34a, 大月書店, 1971年, 86頁])

(16) この点の文化史的背景については, 高山宏『光学の都の反光学——ディッケン

ズとザ・ピクチャレスク』(『目の中の劇場』所収論文)(青土社, 1985年, 231頁—247頁)に詳しい。なお、ここでは夜歩きする人々のことをフランス語(noc-tambule)で示したが、英語ならば「noctambulist」となる。しかし、流行現象としての夜歩きということになると、フランスから始まったらしく、英国においても、夜歩きする人々のことを「noctambule」、そうした現象のことを「noctambulisme」とフランス語で言うのが一般的なようである。(高山前掲書, 236頁—238頁)

- (17) ヴァルター・ベンヤミンは、その未完論文『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』(1938年執筆)において、次のように述べている。

街路を室内と見るところに遊民の幻像は集約されるが、この現象はガス灯の照明と切り離しがたく結びついている。ガス灯が最初についたのは遊歩街(パサージュ)だった。この照明を戸外で用いる実験がなされたのはボードレールの幼年時代であって、そのとき街灯はヴァンドーム広場に立てられた。ナポレオン三世の治下で、パリのガス灯の数は急速にふえてゆく。これによって都市の安全度は向上し、公道上の群集は夜でもくつろげるようになった。(中略)第二帝政の盛時には、大通りの商店は夜の10時前には店を閉めなかった。夜歩き(ノクタンビュリズム)が盛んだったのである。(『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』[野村修訳][『ヴァルター・ベンヤミン著作集6・ボードレール』所収論文][晶文社, 1975年, 88頁])

- (18) 小池前掲書, 112頁。なお、上記の註(17)に記したベンヤミンの論文『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』にも同様な記述がある。ベンヤミン前掲書, 87頁—89頁。
- (19) Charles Dickens: *The Old Curiosity Shop*, edited by Angus Easson, Penguin Books, 1972, p. 43.
- (20) Poe 前掲書, 179頁—180頁。

- (21) ベンヤミンは前掲書所収の論文『ボードレールのいくつかのモチーフについて』(円子修平訳)(191頁—192頁)において、チャップリンが『モダン・タイムス』(1936年)で描いたような、工場労働者の一様に疎外された姿さえここに認めている。

機械との関係において労働者たちは「かれら自身の動きを自動装置の一様で絶えまない動き」に整合させることを学ぶ。この言葉によって、ポーが群衆に負わせようとする奇妙な一様性、衣服と挙措の一様性、とりわけ表情の一様性の上に正しい光が射してくる。

- (22) ベンヤミンは前掲書所収の論文『パリ——19世紀の首都』(川村二郎訳)(23頁)において、このような群集のことを「遊民」(フラヌール)[flâneur]と呼んでいる。そして別な論文において次のように述べている。

ボードレールは孤独を愛したが、かれがのぞんだのは群集のなかの孤独だった。(中略)あらゆるひとが個人として切り離され、無感覚になり、私的利害だけに閉じこもって残忍なまでに冷淡になっている。(『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』, 88頁および97頁)

- (23) William Beckford: *Vathek*, edited with an Introduction by Roger Lonsdale, Oxford University Press, 1983, <<The World's Classics>>, pp. 109 — 110.